

原子力規制委員会委員就任記者会見録

- 日時：平成26年9月19日（金）16:00～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長、田中委員、石渡委員

<冒頭挨拶>

○司会 それでは、予定の時間となりましたので、只今から、本日付で原子力規制委員に就任されました田中知委員と石渡委員の就任会見を行いたいと思います。

まず初めに、田中知委員の方から一言御挨拶をお願いいたします。

○田中知委員 本日付で原子力規制委員会委員になりました、田中知でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

一言ということでございますが、本日、辞令を頂きまして、一層身の引き締まる思いをしております。全力を尽くして責任を果たしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 それでは、石渡委員、お願いいたします。

○石渡委員 本日、原子力規制委員会委員を拝命しました、石渡明と申します。

地質学を専門としておりますが、地球科学者としての立場から、この原子力規制委員の仕事に邁進していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

<質疑応答>

○司会 それでは、只今から皆様からの質問をお受けしたいと思います。

いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから、どちらの委員に質問をするのかを明らかにした上で質問の方をお願いいたします。

時間が16時40分までと限られておりますので、質問の方は簡潔によろしくお願いいたします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。

ホンダさん、どうぞ。

○記者 日本経済新聞のホンダと申します。よろしくお願いいたします。

両委員にお伺いしたいのですが、先日、就任が決まったときの会見で、お二人とも科学を重視するというこれまでの立場というのは変わらないという趣旨のことをおっしゃっていたと思うのですが、一方で、人が代わるというのは、やはり何かはこれから変わることがないという意味がないわけで、お二人にお聞きしたいのは、規制委員会として守っていききたいもの、それから、これからこう変えていきたいということをそれぞれ挙げていただきたいのですけれども、よろしくお願いいたします。

○田中知委員 では、私の方から簡単に答えさせていただきます。

原子力関連施設の規制でございますから、科学と技術をもとにするのは当然でございます。同時に、科学と技術については、日夜進歩がありますから、最新の知見も入れていかなければいけないということかと思えます。

同時に、原子力規制委員会は、原子力規制庁の方とも連携してやっていくわけでございますから、原子力規制庁の方についても、人材の育成とかレベルアップというのも重要な課題かと思っております。

- 石渡委員 皆さん御承知のように、この規制委員会というのは、3年半前のあの震災、大津波による福島第一原子力発電所の事故というものを教訓として、反省して設置されたものでございます。ですから、あの事故を二度と起こさないという強い決意というのは私も持っております。そういう点は今までの委員と同じであると。

ただ、これからは、もちろん専門分野も違う人間でありますので、同じようにできるとは限りませんが、精一杯この職責を務めさせていただきたいと考えております。

- 司会 次の方、いらっしゃいますか。

アマノさん、どうぞ。

- 記者 産経新聞のアマノでございます。

お一方に1問ずつ質問させていただきたいのですが、まず、委員長に、更田委員を委員長代理に指名された理由というのは、大変優れた識見をお持ちというのは十分理解しておりますけれども、一番若い人に代理を任せたというのはなぜでしょうか。

- 田中委員長 これまで2年間の経験などを踏まえて、一応、専門性とか今後の対応とかも考えて選ばせていただきました。

- 記者 それでは、石渡さんに、石渡さんが加わることで地震・津波に対する審査はどう変わっていくのかというところを聞きたいのですが、つまり、昨日、島崎さんが、石渡先生になって島崎さんが苦勞をされたところがスムーズに進むのではないかという御見解を示しているわけですが、そのいわゆるスムーズにいくところというのはどういうところか、あるいはどう変わっていくかというところを教えてください。

- 石渡委員 私は、そのスムーズということがどういうことであるかというのは、私に聞かれてもそれは答えることはできません。ただ、はっきり言えることは、私は地球科学をずっとやってきております。例えば、今、始まった火山に関することです。こういうことは、島崎先生よりは私の方が専門に近いかなと思っております。そういう点は、何とかこれから、本格的な火山に対する対応というのが、今、始まったばかりでありますので、そういう点はできればスムーズに軌道に乗せたいと考えております。

- 記者 田中知委員にお聞きしたいのですが、福島第一原発事故に関して、今回、御担当をサポートされるという立場と伺いましたが、この前、学会等でも中心になってまとめられたように、事故の廃炉に関してどう関わっていくかというところをお聞きしたいのですが、例えば、現状として汚染水問題が一向に解決しないという部分であると

か、その停滞状況に規制委員としてどう関わっていくかというところを教えてください。

○田中知委員 本日の臨時会議で委員長の方から、更田委員をサポートしてと言われました。更田委員は、いろいろな原子炉とか伝熱流動等の専門でございます。私は放射性廃棄物とか、その辺のところをずっと研究をやってきてございましたので、私の専門とするところで更田委員をサポートできればという観点で、委員長あるいは更田委員とも相談してこれから具体的に考えていきたいと思えます。

○記者 ありがとうございます。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。

では、ヤマダさん、どうぞ。

○記者 新潟日報のヤマダと申します。

石渡委員にお聞きしたいのですけれども、私も審査の関係でお聞きしたいのですが、日本海側は東京電力の柏崎刈羽もありますし、日本海側の原発の審査に関して、進んでいるものもありますし、進んでいないものもありますが、日本海側の地震とか津波に関する調査・研究ですとか、知見というものが不足しているというような御指摘というのが、前任の島崎先生も含めて、少なからずあると思うのですけれども、日本海側の原発の審査に当たってそういったあたりをどう考慮されていくのか、お聞かせいただければと思います。

○石渡委員 日本海側ということでは、実は私は金沢大学に22年間おりました。その間に阪神大震災、兵庫県南部地震が発生しまして、その後、これは日本海側に限らず、全国の活断層の調査というものが一斉に始まりまして、非常に大きな進歩があったと私は考えております。その意味で、日本海側が太平洋側に比べて、内陸地震に関して特に地震とか活断層の面で研究が遅れているというようなことはないと考えております。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。

では、カミデさん、どうぞ。

○記者 フリーランス記者のカミデと申します。

田中先生にお聞きしたいのですけれども、就任の大分前の会見でも同じようなことが出たと思えます。ちょっと失礼な言い方になるかも知れませんが、田中委員に関しては、島崎委員がある意味で更迭されて、そして、入ってきたというような報道をされたかと思えます。再稼働を願っている人たち、経済界とかは非常に期待が大きい。逆に、それに反対している人からは田中先生に関して非常に抵抗が大きいという報道もなされております。よくも悪くもそういうプレッシャーというのをお感じになっておりませんか。もし誤解であるのであれば、そういう批判に対してどのようにお答えになるのか教えていただきたいと思えます。

○田中（知）委員 特にそういうふうなプレッシャーは感じておりませんが、逆に言うと、本当に規制委員会の委員として要求されている仕事を、独立性をもってしっかりやっていくということが私の重要な点かと思えます。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。では、前から2番目の方。

○記者 東京新聞のアライと申しますが、田中知委員にお伺いしたいのですが、先程の関連で、国会のときにも疑義があるということでありましたが、今後、そういう審査があって、ずっとそういうことが続いていくと思うのですが、そういったところで、今回、辞退するとか、そういったお考えはなかったのでしょうか。

○田中（知）委員 そういうようなことに対して、本日、答える必要がないかと思えますが、実際に国会で了解された、また、本日、就任した暁におきましては、しっかりと規制委員としての使命を全うするということでございます。そういうことが、実際の、これから、働きとか、言動の中にそれを反映させていきたいと思っています。

○記者 あと一点、委員長にお伺いしたいのですけれども、そういった疑義が持たれることについて、委員長はどう感じていらっしゃいますかね。

○田中委員長 疑義を持つかどうかは私が判断することではなくて、持つ人がいるということで、私自身が選ばれたときも同じようなことを言われましたから、まあ、これは世の常だろうと思っていますけれども。特にコメントすることはございません。

○司会 他にいらっしゃいますか。では、ニイさん、どうぞ。

○記者 共同通信のニイと申します。

田中委員にお伺いしたいのですけれども、今日の臨時会の担務の発表で、サイクル関係の基準と審査と同時に、もんじゅに関しても御担当することになりました。もんじゅに関しては、いろいろないきさつがこれまでであったと思いますけれども、一専門家として、FBRの技術的な成立性と、あと、今後の日本における開発の必要性について、どうお考えでしょうか。

○田中（知）委員 技術的な意義、あるいは今後の核燃料サイクルの中でのもんじゅの位置付け等については、政策的なことになりますので、私とすればコメントをさせていただくことを避けたいと思います。

一方、もんじゅにつきましては、御存じのとおり、事業者が様々な対応を行っているところでございますので、そういうものが出てきた段階で、しっかりと厳格に確認していきたいと思っています。

○司会 次の方。オйкаワさん、どうぞ。

○記者 日経新聞のオйкаワと申します。

田中知委員と石渡さんにそれぞれお伺いしたいのですけれども、お二方、担当が先程

決まったのですけれども、特に具体的な課題というか、今の段階で、ここが自分の仕事として大きな課題になっていくだろう、重要な任務になるだろうという、想像されるどころがありましたら、お聞かせいただけますか。

- 田中（知）委員 先程の臨時会議で、主に引き継ぐ分野という形で委員長から説明があったかと思えます。それにつきましては、核セキュリティ、保障措置、燃料サイクル、廃棄物関係、もんじゅと、それから、1Fの廃炉については更田委員をサポートすると。これが全て重要であろうかと思えます。その中で、特に優劣はつけてごさいませんが、廃炉につきましては、更田委員と相談しながら、廃炉を進めていく中で、トータルリスクをどう低減していくのかということは大変大事かと思っています。また、廃棄物の問題も結構重要でございまして、廃止措置に伴って出てくる廃棄物の基準をどう考えていくのかということも早急に検討しないといけない重要な課題かと思っています。
- 以上です。

- 石渡委員 私につきましては、島崎先生がなさっていたことを継承するということですので、敷地内、破碎帯の調査、それから、先程も申し上げましたが、最近始まった火山に対する対応をどうするかということが中心になるのではないかと考えております。

- 司会 他にいらっしゃいますか。シズメさん、どうぞ。

- 記者 共同通信のシズメです。

石渡委員にお願いします。今、言及がありました敷地内破碎帯の関係なのですけれども、推薦学会から集まった有識者の構成というのは、今後も変わらないということでお考えでしょうか。それとも、ちょっと長引いているのでということも少し耳にするのですが。

- 石渡委員 有識者の先生方には、結構長丁場になってきていまして、大変な御苦勞をおかけしている、心労も相当なものではないかと察しております。そういう点、非常に心苦しい思いであります。ただ、やはり継続性ということが大事でありまして、その点では、すぐに全員を交代させるとか、そういうことはできないと思います。ただ、それぞれの評価の進行に応じまして、必要があれば見直しということは考えていかなければいけないとは思っております。ただ、具体的にどうこうということは、ここではお話しできません。

- 記者 1つだけ。もし島崎前委員と、引き継ぎではないですけれども、何か就任に際してお話をされたことで御紹介いただけるような内容があれば教えてください。

- 石渡委員 もちろんお話ししましたが、ここで御紹介するのが適当なような内容はございませんでした。すみません。

- 司会 次の方、いらっしゃいますか。シュゾウさん、どうぞ。

- 記者 毎日のシュゾウです。

田中さんに2点お聞きします。

1つは、過去の御発言のことなのですが、経産省の基本問題委員会の委員をなさっていたときに、30年代以降も一定の原子力を維持することが必要、あるいは1F事故によって原子力のリスクが高まったわけではないと、そういう趣旨の御発言、あるいはメモ等を発表されておられますが、現在、規制委員になっても、こういったお考えはそのままお持ちかどうかということが1点。

もう一つは、日本原燃などの会社から、今年まで報酬と交通費を受け取っていたということが東京大学など、明らかにしておられますが、これについて、幾ら受け取られて、どういう趣旨でということ、できればこの場で明らかにしていただきたいのですが、この2点お願いします。

○田中（知）委員 1点目でございますけれども、原子力政策どうのこうのということについては、コメントを差し控えたいと思います。原子力規制委員会委員となって、その職務を全うするということが私に課された重要な使命だと思います。

日本原燃に関連しましては、規制庁、あるいは東京大学に聞いていただければいいかと思いますが、私の記憶が正しければ、技術的な観点について、専門的な観点から意見を言うと、そういうものであったかと思えます。

○記者 額などは。

○田中（知）委員 事務局、あるいは東京大学に聞いていただくとはっきり分かるかと思えます。

○司会 他にいらっしゃいますか。では、モトキさん、どうぞ。

○記者 NHKのモトキと申します。お二方にそれぞれお聞きしたいのですけれども、まず、石渡委員に、前任の島崎委員は、現在の地震や津波に関する知見には限界、あるいは不確かさがあるということ十分に踏まえて、より安全サイド、安全サイドに考える姿勢がすごく見られたと私は受け取っているのですけれども、それについて、先生はどんなふうに御覧になっていたかということと、先生はどのようなお考えで審査等に臨まれるかをお聞かせください。

○石渡委員 そのことにつきましては、全く島崎先生と同じ考え方であります。不確かさというのがもちろんございます。そういう場合に、やはり安全側に見ていくというのは当然であると考えております。

○記者 続いて田中委員にお聞きしたいのですけれども、これまでの原発の安全審査等々における事業者の姿勢というのをどんなふうに御覧になっていたのかということと、これまで研究者という立場で事業者等々とかかわりがあったと思うのですけれども、今後は規制者という立場で、どんな姿勢、考え方で対峙していかれるのか、これについてお聞かせください。

○田中（知）委員 原子力学会の事故調の報告書かどこかにも書いたかと思えますけれど

も、個人的には、原子力にかかわる全ての組織と専門家は安全向上に真剣に取り組むということが必要であって、それができない組織と専門家は原子力に携わる資格がないのではないかと、そういうふうな基本的な考えでございます。そういうようなことで、同じようなことが事業者には当てはまるし、事業者のトップマネジメント、あるいはそこでの技術力の要請、人の要請というのが、大きな観点からやっていくと。それから、結果として、その事業者の安全性というか、安全文化の向上になっていくのではないかと考えています。

○司会 他にいらっしゃいますか。タケオカさん、どうぞ。

○記者 共同通信のタケオカと申します。

先程の毎日新聞さんの質問の関連で委員長にお伺いしたいのですけれども、今日は、田中知委員が今後はサイクル関連も担当されるということで、今、更田さんがされている再処理工場の審査もやることになるのだと思うのです。それで、委員就任前ではございますけれども、そういう事業者側での活動実績から考えると、いわゆる利益相反に当たるのではないかとと思うのですが、委員長のお考えをお願いします。

○田中委員長 一つは、田中知先生はそういった燃料サイクルとか廃棄物についての非常に詳しい専門家であるということが一つです。

利益相反というのはどういう意味かよく分かりませんが、審査をする過程において、安全の評価をしていく過程において利益相反ということは、ちょっと私には考えられないです。

だから、どういう意味でおっしゃっているのか分かりませんが、全てが更田委員というわけにもいかないわけで、もうほとんど物理的にもパンクしているような状況ですし、今、適合性審査をやっていますが、これから工認とか検査制度とかいろいろなこともやっていくということになりますと、大変な仕事ですから、やはり5人がそれぞれの得意分野というか、専門性を生かして当たっていくというのが一番いいと思っています。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。

○記者 ごめんなさい。もう一点だけ。

利益相反というのはいろいろ意味があるみたいなのですけれども、私が言ったのは、事業者側から報酬を受け取っていると、その審査において中立的な判断ができるかどうかという観点で言ったのですが、最後に田中知委員に、先程と繰り返しになってしまうのですが、そういう声の一部が出ていることについて受け止めをお願いします。

○司会 田中知委員に。

○田中委員長 私でなくて、知先生。

○記者 すみません。知委員をお願いします。

○田中知委員 恐らく日本原燃のガラス固化についてなかなかうまくいっていないという

ようなところについて専門的な立場からコメントをする委員会の委員であったということかと思えます。それが、今回、日本原燃の六ヶ所再処理施設の新規制基準適合性審査等々においては、それとは全く別の、独立した観点でしっかりと審査していくということには変わりはありません。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。では、ツカハラさん。

○記者 電気新聞のツカハラと申します。

お二人にそれぞれお聞きしたいのですけれども、石渡委員は「不確かさがあることは安全側に判断するのは当然」としつつ、以前「委員に就任した暁には、国際基準を把握して判断したい」とおっしゃっていました。これ、具体的にお話できることがあればお聞きしたいというのが1点です。

それと、田中知先生には、「孤立しない独立性と同時にコミュニケーションが大事」とおっしゃっていました。何か具体化するための仕掛けなど考えておられることがあればお教えてください。

○石渡委員 国際的な基準につきましては、個々の事例についてはここでは差し控えたいと思いますが、IAEAとかアメリカ、フランスなどの基準を参考にしながらやっていきたいと思っております。

○田中知委員 「孤立しない独立性」というのは大変言葉は重要なことでございますが、もっと重要なのは、それを具体的にどうしていくのかという観点でございます。もちろん規制委員会の内規等も順守しながら、どうするかについては、外国の例なども勉強させていただき、これから規制委員会の中でしっかりと議論していきたいと思っております。

○司会 はい、他はいらっしゃいますか。よろしいですか。マツイさん。

○記者 テレビ朝日のマツイです。

田中知委員にお伺いいたします。

田中知さんは、学会事故調で事故の原因を委員長としてずっと追求なさっていたのですが、その中で、例えば限られた予算とか組織のまとまりということで、大変苦しみながらまとめられていたのを取材しておりました。

それで、今回は規制委員会として当然福島第一原発事故の事故調査のさらに追求というものは間違いなく1つの項目に入っているはずなのですが、このことに関する学会事故調時代にできなかったもの、何をどうしたいか、具体的にあったら教えてください。

○田中知委員 原子力規制委員会でも事故の原因調査等についての検討が進んでいるということを認識してございます。私がおの分野なのかどうか分かりませんが、本当に科学的・技術的に検討し、さらにこれから廃炉作業が進んでいく中で、どこをどういふうに見ていけばより現実的に明らかになっていくのかというふうな観点が重要かと

思っています。

○司会 はい、次の方、いらっしゃいますか。では、タナカさんから。

○記者 どうも、西日本新聞のタナカと申します。

石渡先生に1点お尋ねしたいのですけれども、火山の検討チーム、今、議論が始まっていますが、今後、川内原発がこれから工認とか始まると思うのですが、検討チームの内容というのはこれから工認の審査とかそういったものにも何か反映されるようなことになっていくのか、それとも、全く別に切り離れたものになるのか。そこの御見解をお願いいたします。

○石渡委員 現在進行中の火山のことにつきましては、ここで具体的に今後の見通しとかを発表する立場にはまだないと思います。現在、火山の専門家の意見を公開の場でお聞きしながら、今後どういうふうにやったらいいかということを探している段階です。

あと、これからは私がそれを、采配をとらなければいけないわけですが、今日就任したばかりでありまして、まだ具体的な道筋というのは頭の中に描けてはおりませんが、火山というのは私もずっと研究は続けてきたものでございますので、なるべくこれからの審査に活かしていけるような大きな枠組みというものを、できれば普遍的な枠組みというものをなるべくならば作りたいと考えております。

ただ、そこまでいくかどうかはまだちょっと分かりません。

○司会 はい、他はいらっしゃいますか。では、最後はカワハラさんで、これで終わりにしたいと思います。

○記者 すみません。朝日新聞のカワハラと申します。

9月4日に田中先生も石渡先生も、福島第一の原発の方に行っているかと思うのですが、それぞれそのとき御視察されて、その御所感などあればお聞かせください。

○田中知委員 私、実は福島第一原発には5～6回、これまで行かせていただきました。それで、また今回行かせていただいて、またいろいろな状況が進んでいることがよく分かりました。かなり改善されているものもありますし、まだまだ問題が残っているものもあろうかと思えます。

今後は、先程申し上げましたが、本当に廃炉の中でのトータルのリスクをどういうふうに考えていって、それを少なくしていくのかという観点から、ロードマップありきの検討等をしっかりしていくことが大事であって、それを規制委員会としてもしっかりと見ていきたいと思っています。

○石渡委員 私は、福島第一原子力発電所、第二原子力発電所に訪問したのは、今回が初めてであります。

福島第一の方は、ああいう非常に困難な状況の中でたくさんの方が、数千人の方が一生懸命働いていらっしゃるということに非常に感動しました。それで、管理区域とそれ

以外との出入りとか物すごく厳しく、きちんと管理されていると感じました。

あと、非常に中で出会う作業員の方々がみんな士気が高いと感じまして、皆さんそれぞれ自分の役割をよく理解して、一生懸命やっているということが伝わってきました。そういう感想を持ちました。

○司会 はい。それでは、本日の会見、これで終わりにしたいと思います。御苦労さまでした。